



空白の黙示録
荒巻義雄
祥伝社
(2/5刊・¥660)

『空白の十字架』にはじまった『空白シリーズ』の第五作目、久々の刊行である。

主人公新沢大作は、今回インドに旅立つ。そこで彼は建築家の神城と出会う。神城は、三輪秦王の主宰する教団から、神殿の設計を依頼されていた。新沢は、そこに不思議な暗合を感じる。人間と歴史の波が混交するインド、古代クメール遺宝の謎、世界に広がる教団の陰謀とは……無数の要素は、最後の結末にむかって複雑にからみ合っていく。

本書は、第六作（未刊）の前半にあたる作品で、物語の結論はまだ出されていない。これまで、日本に渡り、墓を残したと伝えられるキリストの伝承にはじまって、ムー大陸や宇宙人と古代史の関連などを、シリーズは多彩に描き分けてきた。物語の厚みは、今度の作品で、（夢枕獏や河野典生らとは、また違った意味の）インドを書くことにより、さらに増したように思える。四作目までは、ほぼ年一回だった刊行ペースが、大幅に遅れたことでもわかるように、作者の力の入れようも違う。人物の動き、謎の意味を含めて、シリーズ屈指の面白さがある。次作、完結篇の、早期刊行を期待している。